

平成30年度入学（一般入試 前期）試験問題の出典

総合政策学部

種別		著者名	著作物名	書名等	版元
総合問題	資料B	ニック・ポー タヴィー 阿部 直子 訳	幸福の計算式 結婚初 年度の「幸福」の値段 は2500万円!?	阪急コミュニ ケーション ズ, 2012年より	阪急コミュニ ケーションズ
	資料C	枝廣 淳子 草郷 孝好 平山 修一	GNH（国民総幸福）－ みんなでつくる幸せ社 会へ	海象社, 2011年より	海象社
	資料D	デレック・ボ ック著 土屋 直樹, 茶野 努 訳 宮川 修子 訳	幸福の研究 ハーバ ード元学長が教える幸福 な社会	東洋経済新報 社, 2011年より	東洋経済新報 社

平成 30 年度 一般入試・前期

総合政策学部

総合問題 (120 分)

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この冊子は、7 ページあります。なお、下書き用紙が 2 枚あります。
- 3 試験中に問題冊子及び解答用紙の印刷不鮮明、ページの脱落などがあった場合は、手を挙げて試験監督者に知らせなさい。
- 4 解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペンや万年筆などを使用してはいけません。
- 5 解答用紙には、氏名及び受験票と同じ受験番号を忘れずに記入しなさい。
- 6 解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 7 下書きの必要があれば、下書き用紙を利用してかまいません。
- 8 試験終了後、問題冊子と下書き用紙は持ち帰りなさい。

資料(A)~(D)を読み、次の問いに答えなさい。

1 資料(A)を読み、以下の設問に答えなさい。

- (1) 下線部(i)を和訳しなさい。
- (2) 下線部(ii)を、よりその具体的内容が分かるように2つの英単語を用いて表現しようとする
と、1つがHappinessであるなら、それに伴う英単語としては何が最も適当か。本文の中か
ら1つ選びなさい。

“Happiness [_____]”

- (3) 下線部(i)を和訳しなさい。
- (4) 下線部(ii)を和訳しなさい。

2 資料(B)は、幸福と社会政策に関する会議において基調演説を行ったポール・フリテルスの主張を紹介した文章である。ポール・フリテルスは、幸福という基準を社会政策の基本方針とするのなら、政策はどのような考え方を大切にして作られるべきだと暗示的に主張しているのだろうか、あなたの解釈を80字以内で述べなさい。

3 資料(C)は、ブータン王国の国民総幸福量(GNH)の指標と指数である。資料(B)を参考にしながら、資料(C)について、以下の設問に答えなさい。

- (1) ブータンの人々は、どのような社会生活の状態に最も幸福を感じているのか、50字以内で答えなさい。
- (2) 他方、ブータンの人々は、どのような社会生活の状態に最も幸福を感じていないのか、50字以内で答えなさい。
- (3) 総合評価を9つの指標全体の平均値にするとして、総合評価の指数の値を計算しなさい。なお、小数第4位を四捨五入して、小数第3位まで答えなさい。

4 資料(A)~(D)の内容を踏まえて、政府は市民が高い幸福度水準を達成するための政策を積極的に講ずるべきかどうかについて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

資料(A)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません

(Richard Layard, "*Happiness: lessons from a new science*", Penguin Books, pp.3-4, 2005
より、一部改変)

(注)

- (i) old wives' tale : 迷信, たわいもない話
- (ii) devastating : 衝撃的な
- (iii) subsistence income : 最低生活収入

資料(B)

ジグミ・シンゲ・ワンチュクは平凡な統治者ではなかった。1974年に18歳でブータン(ヒマラヤ山脈の東端にある南アジアの小国)の最年少国王となった彼は、国を改善するための構想を当初から抱いていた。それは、西洋社会に住む人にとっては奇妙で実現不可能だと思われる方法によるものだった。だが、彼は31年の在位期間に、国中のすべての人が受けられる無償医療と教育制度をほとんど独力で導入した。その功績はとてすばらしく、西洋の豊かな国々はその手法を見抜くことさえできなかつた。道路や橋が突然現れて、ブータンのもっともへんびな荒涼とした地域へもつながった。さらに目覚ましい功績として挙げられるのは、彼の在位中にブータンの平均寿命が38歳から66歳へと大幅に伸びたことだ。だが世帯収入は世界最低水準のまま、年間1人当たり約4000ドルだった。

国連開発計画(UNDP)のブータン担当幹部ステファン・プリーズナーによると、ブータンの発展が成功(あるいは失敗—それは31年間で社会基盤が大きく改善されたことと経済的發展が進まなかつたことのどちらに着目するかによる)したのは、国王の力強い構想に帰するところが大きい。それは、人々の幸福を国の発展プランの中心に据えることだった。彼が示した「国民総幸福量」(GNH)の概念は、公平で持続性のある社会経済の發展、文化的価値観の保持と促進、自然環境の保全、理想的な統治形態の確立から成っている。これらを達成するために、ブータン政府はテレビチャンネル数の制限(そしてレスリングやMTVなどの番組の禁止)、広告宣伝の制限(個人の願望が高まりすぎるという理由で)から、ビニール袋やタバコの禁止(環境や個人の健康を損ね、人々を不幸にするという理由で)に至るまで幅広い政策を導入した。

これらの急進的な政策は、当初導入されたときに誰も異を唱えなかつたため問題なく採用されたが(2008年まで絶対君主制が敷かれていたのも理由のひとつだろう)、イギリスやアメリカといった世界の他の国でもこうした政策がうまく実行できるのかどうか、また本当に私たちすべての幸福度を上げ、維持できるものなのかどうかは疑問である。

私がポール・フリテルスに初めて会ったのは、2007年の夏にタイを訪れたときだった。オーストラリアのクイーンズランド工科大学の経済学教授であるポール(2009年にはオーストラリア経済協会によってオーストラリアでもっとも優れた40歳以下の経済学者に指名された)は、カウボーイハットに真っ白いシャツといういでたちで、人混みの中でとても目立っていた。私は、彼が親しみやすい人であることを願いながら自己紹介をした。幸運なことに彼は願っていたとおりの人物で、私たちは意気投合した。

ポールと私は、UNDPバンコク地域センターで行われた、幸福と社会政策に関する会議に出席していた。タイ政府とUNDPによって開催されたこの会議の目的は、幸福を、タイや世界の他のすべての地域のすべての社会政策の基本方針にするべきだという考え方を普及させることだった。ポールは基調演説者のひとりとして招かれていたのだ。

自分の話す順番を待っている間、ポールは私のほうを向いて尋ねた。「ニック。ここでは何を

言うてもかまわないんだろうか?」。私は驚いたが、とりあえず「もちろん」と答えた。ここの誰かの気分を害するようなことを彼が言うとは思えなかったからだ。30分後、ポールはタイの副首相やブータン前首相を含む500人の聴衆の前に立った。

「今日、ここでみなさんにお会いできて光栄です」と彼は話し始めた。「10年前、幸福経済学は疎ましがられていました。私たちが研究していることを誰も知ろうとはせず、人々が人生に対してどう感じているかを調べることに価値があるとは思ってもらえませんでした。そして、経済成長だけが重要だと考えるのが妥当だと、ほとんどの経済学者が考えていました。この会場にいらっしゃる多くの方たちは、世界の人々が幸福について真剣に考えることを長い間待ち望んでいらしかったと思います。この会議に参加できることを、私はうれしく思います。友人に囲まれているような気がしています」

「ですが、友人同士なら、不愉快であっても真実を話し合わなければなりません」。ポールの顔つきは真剣になった。「会議の冒頭で見せていただいたビデオには、貧しいけれど、おそらく人間関係は豊かで幸福そうな人たちのいる村が映っていました。あのビデオが伝えようとしていたのは、経済成長によって村民たちがそうしたネットワークを失い、ステータスや競争に気を取られて幸福を失うだろう、ということでしょう」

「誰がこのような忠告をしているのでしょうか？ 自分の財産を手放すことによって他人が金持ちになることを望まない人でしょうか？ 今日この会場にいらっしゃる方たちは、みなさん身なりがよく、外には高級車を停めていて、ノートパソコンが目前にあり、豪華なホテルに泊まっていて、いつも世界中を飛行機で飛び回っていらっしゃる。そんなあなた方は、自分はしないことを村民たちにさせようというのでしょうか？ 私たち自身が主にステータスを考えてお金を求めていることをよくわかっているのなら、この村民たちが同じことをするのを拒否できないでしょう」

「また、地域ネットワークがどのようにして崩壊するかを考えてみると、それは国際化や国際競争のせいだとは言えません。政府が地方に学校や病院や道路を作っていることが原因です。そうした学校や病院が祖父母や町医者にとって代わり、地域ネットワークが存在する経済的根拠を奪っています。村民たちが地域社会から逃れて都市部に来るようになったのは新しくできた道路のせいです。学校や病院や道路を作っているのは国際資本ではありません。政府がそれを行っており、貧困を解決したいからというのがその理由です。だから、人々にステータスを目指させ、地域社会のつながりを崩壊させているものは何なのかを知りたいければ、研究や他人に頼る必要はありません。私たち自身に答えを求めればいいのです」

あとでポールは私に、「これが厳しい現実なのだ」と言った。誰かが言わなければならない。タイ政府の役人たちが彼のスピーチをどう思ったか私は心配になったが、結果的には彼がそう言ったのは正しかったと思う。

そしてもちろん、誰かがそれに耳を傾けるべきなのだ。

(ニック・ポータヴィー著、阿部直子訳『幸福の計算式 結婚初年度の「幸福」の値段は2500万円! ?』, pp.230-234, 阪急コミュニケーションズ, 2012年より、一部改変)

資料(C)

この部分の問題は、著作権の関係により公開できません

(注)

- (i) ここでの指数は、各指標において、「幸福のレベルに達している」と答えた人々の割合を表している。例えば、ある指標の指数の値が0.123である場合、仮に1000人にアンケート調査を実施していたとするなら、その中の123人が「その指標については幸福のレベルに達している」と答えたことになる。

(枝廣淳子, 草郷孝好, 平山修一『GNH(国民総幸福)—みんなでつくる幸せ社会へ』, pp.59, 海象社, 2011年より, 一部改変)

資料(D)

幸福を政策の焦点とすべきだという説得的な議論がある。ソクラテスからジョン・ロックを経てジークムント・フロイトに至るまで影響力のある思索家たちは、幸福が人間にとって最も重要だと主張してきた。世論調査によれば、幸福は人々が実現したいと思う目標のトップにいつも位置し、その高い関心は、民主国家において必ず重視すべきものである。さらに、持続する幸福に至るには、つかの間の快楽やつまらない趣味を際限なく追い求めるより、市民として社会参加したり、他人に親切な行動をとったりするなど、はるかに社会のためとなる行為を伴っている。そしてまた、幸福水準の高い人は、健康で、結婚に満足し、仕事面でも有能で、さらに公共心がある寛容な市民であることが多い。幸福の源泉と効果がともにそれほど価値のあるものであれば、賢明な政府はすべて、市民が高い幸福水準を達成することを支援する政策を立案したいと考えるだろう。

幸福は重要だという以上の議論にもかかわらず、政府が幸福を高めるよう努力すべきことに、すべての人が同意するわけではない。読者のなかにも、幸福以外でもっと重要と考える目標をもっている人がいるのは疑いない。そういう人は、自分の高い潜在能力を最大限に発揮することや、道徳的な生き方をすること、精魂を傾けて神や他人の幸福に献身することに、もっと大きな価値をおいているかもしれない。

こうした目標は心に響くように思われるかもしれないが、立法者がある特定の美德や宗教的信念、もしくは自分が好む他の価値観を政府の適切な目標として公言するなら、それは重大な誤りである。民主国家では、政治指導者は市民の代表である。人々の幸福を高めるために選ばれているのであって、自分が考える模範的な生活を押しつけるためではない。道徳的生き方のように感心できる目標でさえ、他人のために押しつけければ、怪しげなものになる。イマニュエル・カントはかつてこう述べた。「義務であると同時に目標であるもの、それは自己の完成と他者の幸福である」。同じように、政治家(や哲学者)が自己のために望む何らかの目標を選んで、人々を説得してそれを受け入れさせようとするかもしれない。しかし政治家は、(他者の正当な権利や利益を守るために必要な限度を越えて)国家権力を用い、自らの価値観を有権者に受け入れさせようとするべきではない。

この議論には同意するとしても、政府が追求すべき適切な目標として幸福を選択することをためらう人がいるかもしれない。200年近く前に、ベンジャミン・コンスタントは、国家の適切な目標はただ1つ、自由だと主張した。幸福に関しては次のように述べている。「(官職にある者は)ただ公正でありさえすればよい。幸福になる責務は、われわれが自分自身に対して負うものである」。もちろん彼がこのように書いたのは、政府が、今日よりもはるかに、国民の利益を最優先として行動しそうでなかった時代、つまり現代の西欧民主主義以前の時代である。だが今日でも、多くの自由主義者が、敵から国家を防衛することと、個人の自由や他人の財産権を不正に侵害する行動を誰もとることがないようにするために、必要な規則を実施して個人の自由を保護

することに、政府の行動を制限しようとしている。

このような見方を共有する人の多くが、政府はたいてい誤りを犯しがちな政治家によって運営されていて、その政治家は自分が公職を固守することに役立っている特定の利益団体の便宜をしょっちゅう図ろうとしていると信じている。彼らは、政治家たちはこのあり様なので、政府の権力を制限して個人に最大限の自由を与え、各人が市場の見えざる手に導かれつつ自らのやり方で自ら主導して幸福を追求することがよいと主張する。

(デレック・ボック著、土屋直樹、茶野努、宮川修子訳『幸福の研究 ハーバード元学長が教える幸福な社会』、pp.57-59、東洋経済新報社、2011年より、一部改変)